



フェノロサ夫人の 東京日記

Apr.1897 - May.1900

村形明子 綴

岸田夏子 画



十九、京都から帰るアーネストを国府津で
出迎え

七月六日（火）

早朝名古屋のアーネストから、その晩七時に新橋着

どなかった。彼は私の知らせに驚き、私がそれを受け入れたやり方をむしろ信じられないようだった。

横浜駅で運よくペイン氏に会う。彼はアーネストに「エンプレス」は八日まで入港しないだろうと言った。横浜で途中下車しなくてすんでほっとした。東京に直行して留守番の一同をびっくりさせた。夕食は缶スープと鰻。アーネストが心身とも疲れ果てているので、早々に就寝。

七月七日（水）

重大な日。アーネストと私は午前中大半を電報への回答をきわめて真剣に協議して過ごした。彼は私たちが処分されずに済むよう条件を受諾する方がよい、と感じ始めたようだが、あまり説得力がなかった。十二時頃彼は電報を持参、大きな郵便局「本局？」から発信した。ことがうまく運ぶよう、天の恵みあれ。

アンは野菜を買いに行き、午後仕立屋が来た。彼は私の茶羽織の最初の仮縫をした。後でアンと私は目を見張るような素敵なケーキを作り、彼女がデコレーションをつけて高嶺家へ送った。高嶺は礼状に小さなアイリッシュ・ポテトと美しい伊万里小杯二個を添えて

と電報が届いた。これで彼の各駅着の時間を計算できる。私は電報と手紙を持って彼を迎えに国府津駅へ行った。十二時半に家を出、三時に到着、一時間半待ち。茶屋の少女たちは私を憶えていた。

お茶を飲んでから浜辺へ行った。風が快い。あまり長く海を見ることなく——好きでない——斑入りの小石を積み上げ、掘り出した。あそこ程きれいな小石を見たことがない。

茶屋へ戻ると、イギリス人たちが馬車に乗ろうと苦勞していた。彼らの「ボーイ」はとんまで、人力車夫に法外な料金をふっかけられ、老いぼれ馬、置き去りにされた手荷物等トラブルが生じていた。私は助け舟を出したが、あまりうまく行かなかった。最後に見た彼らはまだ荷物無しに狂奔していた。

私は切符を買い、アーネストに会えなかったら、と少しびくびくしながら汽車を待った。一輛の一等車へ行ったがいなかった。しかし私が心配する間もなく、彼はスペースを求めて移動した二等車から駆け出して来た。彼は私に会って喜び、夜の長旅の疲れにもかかわらず元気に見えた。彼には前夜川崎「正蔵」とかなり興味深い会見をした以外、報告すべきことがほとんど

返した。夕食後アーネストと私はそれぞれ手紙を数通書いた。重要で多忙な、やや哀しい一日。

七月九日（金）

夕方五時頃、高嶺がケーキの礼に立寄り、私たちは夕食に引き留めた。彼はとても気に入ったようだ。彼は特にくすくす笑いがチャイミングな小柄な人。私たち一同を期限なしに鎌倉へ招待してくれた。

七月一〇日（土）

アーネストは岡倉に会いに行き、ほんの数秒しか会えなかったが、十分だった。私は午前中執筆、午後アンと私はチョコレートとココナツケーキを作った。夕食後最高のヘーゲル講座——今までで最上。

二十、狩野友信・岡倉秋水来訪、アーネストの井上馨訪問

七月二一日（日）

今朝、料理人に新しいメニューを教えるための野菜を買いに出かけた。帰宅後茄子を揚げ、コーンフリッター、ポテト・パネ、コールスロー、スタッフト・ト